んでした。自分の本をレジに持っていくと、店員さんは流れ作業のように会計してくれました。当然本人と気づかれることもなく。

全国書店で本格的に並ぶのは四月に入ってからなので多くの方に手にとってもらいたいなぁと思っています。そんな中で、早くも感想をいくつか頂きました。本当にうれしいです。皆さんからの感想もお待ちしていますよ。機会が会ったらぜひ一度読んでみてください。

レントゲン

「ふれあい歯科ごとう」のレントゲン撮影率はかなり低いです。下手したら新宿一、東京一かも。ある歯科医院では、歯がある人が来院したらもれなく大きなレントゲン（全部の歯が写る）を撮影していました。そのような歯科医院は少なくなく、下手したらほとんどかもしれません。でも、問題は必要な撮影かどうかではないでしょうか。

レントゲンを撮影することは決して悪いことはありませんが、それによって得られる情報が十分にあるときだけ撮影すればいいと思うんです。

例えば、歯がグラグラしていてもう保存できそうにない。周囲の歯ぐきの色や形を見ても残念ながら抜いた方が良さそうだというケースでレントゲンは必要ですか？ もう抜くだけなのに。逆に、歯ぐきが引き締まっていて形も良い、自覚症状もないという方が来院して「歯槽膿漏の状態も調べましょう」といって撮影されることもあります。

歯科のレントゲンの被爆量なんて決して多いものではありませんが、無駄な検査をすることに同意はできません。

これは歯科に限らず医科にもあることですが、無駄な検査があることは間違いありません。あくまでもレントゲンは的確な診査と診断のための補助的方法であるはずです。僕は必要な時期に必要な量だけ検査をすることが正しい診断につながると考えています。ところが「大は小を兼ねる」的な発想でどんどん検査をしていき、結局情報を処理できない現場もたくさんあります。

こういう話をすると、以前整形外科医の父親が「最近の医者は聴診器すら使えないくせに検査ばかりしたがる」などと嘆いていたのを思い出します。どうも血は争えないようで。